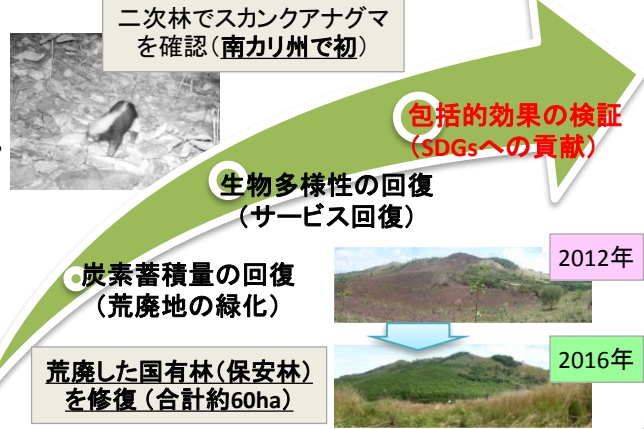


# 住民参加型の森林回復モデルの広域化と ゴムノキを活用したSDGs達成の方向性解析

早稲田大学人間科学学術院 平塚基志 国際緑化推進センター Lambung Mangkurat 大学

## 背景と目的

- ✓ 貧困と資源の持続的利用による経済発展を掲げたSustainable Development Goals (SDGs)が国際連合で採択。一方、「貧困をなくそう」(目標1)という課題が顕著に表れている農山村地域では、資源開発は「陸の豊かさを守ろう」(目標15)と相反しやすい。
- ✓ 途上国の森林保全事業には、持続性を担保するためにSDGsで掲げる、環境、社会、経済の3要素のベストミックスを模索することが重要。加えて、SDGs達成度を評価するための指標が求められる。
- ✓ 以上から、本研究・事業ではSDGs達成を評価するための指標開発を目指す。調査地はインドネシア南カリマンタン州のゴム農園周辺地域の荒廃した国有林(保安林)とする。



## 活動の進捗

### 1st Stage (2017年11月末まで)

1. ゴムノキを活用した住民参加型の森林回復の実践 (写真A)
2. ゴム収穫までの参加住民の収入源の検討 (写真B)



写真A「ゴム苗畑の管理」

### 2nd Stage (2018年5月末まで)

3. SDGs達成の評価手法の検討
4. ゴム農園周辺における住民参加型ワークショップ等の開催



写真B「住民によるワークショップ」

## 今後の展望・課題

- ✓ 森林面積の回復や生物多様性の回復(SDGsの目標15)については、インドネシア南カリマンタン州でのこれまでの取組で定量的に効果を検証済。
- ✓ 一方、貧困対策(SDGsの目標1)は定性的な評価にとどまっており、同時に目標15との関係性(相乗効果若しくはトレードオフ)は分析が未済。
- ✓ 今後のSDGs普及にあたり、その達成への寄与度を評価するための手法開発を進める。定量的評価に加え、17のゴールの関係性を示すことで、今後のSDGs達成を後押しする。

